

■課題研究企画テーマ シンポジウム：「21世紀型能力」とこれからの学校体育

【テーマ設定の趣旨】

全国各地で創造的に授業実践が展開される一方で、「技能」「態度」「知識、思考・判断」すべてを対象とした体育の学力調査が実施されるなど、その実践の成果を精緻に見取ろうとする動きが、近年、活発化している。

同時に、これからの教育の在り方を模索する動きも盛んになっている。例えば国立教育政策研究所は、21世紀を生き抜く子どもたちに習得させるべきことがらとその枠組みを検討した『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』（国立教育政策研究所、2013）の中で、「思考力」「基礎力」「実践力」から構成される「21世紀型能力」を提案している。各教科の成果が問われ、教育の枠組みが問われている現在にあって、この「21世紀型能力」は、今後の教育課程編成に対して影響力をもつものと捉えられている。

ではこの「21世紀型能力」の枠組みを、学校体育ではどのように受け止め、授業実践とどのように結びつけていくことが可能であろうか。本シンポジウムでは「21世紀型能力」をキーワードに、その考え方および授業実践の方向性について議論を展開したい。

【シンポジスト（敬称略）】

今関豊一（国立教育政策研究所）

長町裕子（香川県教育センター・元香川大学教育学部附属高松小学校）

高橋 清（仙台市教育センター）

【コーディネータ】

大友智（立命館大学）

細越淳二（国士舘大学）

【発表要旨】

①「21世紀型能力」の考え方とこれからの学校体育の方向性

～資質・能力としての「21世紀型能力」の検討の動向を踏まえて～

今関豊一（国立教育政策研究所）

次期学習指導要領の枠組みづくりに向けた議論の方向性に焦点を当ててみると、おおよそ次のことが考えられる。このことを踏まえて、当日は議論を深めたい。

（1）芸術やスポーツの分野で育まれる資質・能力についても、そこで培われるものの見方や考え方等には他分野にも転移可能な汎用的なものもあると考えられるところであり、それらについても、貢献すべき資質・能力の中にどのように位置付けるか、検討する必要がある。（「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—について」（平成26年4月4日発表）p12）

（2）各教科等の枠を超えた授業づくりを目指していく必要がある。（p52）

各教科等横断的なテーマについても、育成すべき資質・能力との関わりで、その内容を捉え直すことや、各教科等がどのような役割を持ち、どのように教育課程に位置付けられているか、各教科間の相互関係はどのようにあるべきか 等

(3) 教育目標・内容の視点の候補

1) 教科等を横断する、認知的・社会的・情意的な汎用的スキル（コンピテンシー）、2) 教科等の本質にかかわるもの、3) 教科等に固有の知識・個別スキルに関わるもの

②「21世紀型能力」をキーワードとした展開した授業実践

長町裕子（香川県教育センター・元香川大学教育学部附属高松小学校）

急激な社会変化に伴い、これからの社会で必要とされる子どもとは、「実社会・実生活の中で起こる様々な課題，正解のない課題等に向かって，多様な価値観をもつ人々と共に，互いの意見や考えを伝え合い，認め合いながら自己の生き方・在り方を生み出し，未来を創造していくことのできる子ども」である。したがって，学校教育では，主体的・創造的に自己を高めていく自己教育力をもった子どもを育てるための教育課程の在り方が検討されなければならない。附属高松小学校では，自分の「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方を育む教科学習と，自己の生き方・在り方を創造していこうとする意欲や態度を育む創造活動の2領域からなるカリキュラムを構想している。（この創造活動とは，道徳・特別活動・総合的な学習の時間を統合したものである。）ここでいう教科学習における見方・考え方とは，自分を取り巻く「ひと・もの・こと」に対して，何をどのように見て考えていくのかという見る方法や思考の筋道である。その中で体育科における見方・考え方を「運動したりその動きを見たりしたことをもとに，運動の面白さに気づき，その動きのよさを意味付けること」と設定し，育みたい資質・能力との関係性から，共感的・協同的な問題解決を促す授業こそが大切になるのではないかと考えた。今回は，表現運動領域において主体的な学びを生み出す授業づくりとともに，カリキュラム全体で子どもたちのよりよい問題解決を生み出す学びの在り方について提案したい。

③公立学校の立場からみた「21世紀型能力」と体育授業

高橋 清（仙台市教育センター）

「楽しかった！」、「やった！できた！」、「汗をかかって気持ちいい！」

このような子供たちの声が体育の授業から響いてくる。一方，子供の体力低下，運動の二極化などの課題があるのも事実。学校現場ではこのような課題解決に向け，日々授業改善に取り組んでいる状況であろう。

さて，「21世紀型能力」の考え方を公立学校の体育実践に取り入れるには，どのようなカリキュラムや授業が想定されるのだろうか。まず前述した課題への対応と「21世紀型能力」の考え方を取り入れた授業づくりが求められる。また，「21世紀型能力」を育むためには，指導の在り方の転換や指導の内容，方法，評価等の改善が求められる。学校は，教員は，どのように対応すればよいのだろうか。

ここでは，次の二つの視点からテーマについて考えてみたい。

一つ目は，体育科・保健体育科の学びの価値を改めて考えることである。体育科で身に付けたい資質・能力及び態度と，教科として維持発展させたいことは何かを振り返り，体育科の根底をなすもの，教科として貫くものを明らかにしたい。

二つ目は，「21世紀型能力」を授業へ位置付けることである。「仙台自分づくり教育」と関連させた小学校体育科の実践を参考に，今後の可能性を探りたい。

この二つの視点から見えてきたものを関連付けながら、「公立学校の立場からみた『21世紀型能力』と体育授業」というテーマについて考えていきたい。